◉韓国政府は21名の留学生らを全員即時釈放せよ！
◉日本政府は21名の留学生らの人権回復に努力せよ！

11.22通信

1978年 8月1日
第11・12合併号
1部100円＋カンパ
年6回発行
振替口座
大阪4649・摂津富田教会

発行所
「11・22在日韓国人留学生・青年不当逮捕者を救援する会」
大阪府高槻市富田町3－7－25
摂津富田教会（〒569）
電話 0726－96－2562

5・27 徐俊植氏再び獄窓へ

怒りもて断固闘え
「社安法」（保安監護処分）適用！

われわれの危惧は不幸にも的中した。在日韓国人政治犯で初の刑期満了を迎えた徐俊植氏（30）＝ソ・ジュンシク、京都市西京区＝は、「社会安全法」を適用され去る五月二十七日未明全州矯導所から抜きうち的に大田（テジョン）矯導所に移監、再び練獄の奥深く幽閉された。徐氏は、当局のこの恣意的処断で今後半永久的に拘束される可能性がきわめて強い。彼の〝完全釈放〟を求める動きは世界の〝良心の証し〟として昨年来から「11・22救援会」をはじめとして広範な人々を巻き込み展開され、少なからぬ昂揚を示した。しかし、当局の今回の暴挙は、これらの運動に冷水を浴びせ公然と挑戦状を突きつけてきた。折しも符節を合わせるように、KCIAは金達男氏を日本に派遣し、救援運動の瓦解工作に乗り出してきた。これら一連のしゅん動は、当局が今後在日韓国人「政治犯」に対して強圧的論理で対処する方向を打ち出したといえよう。いまや諸救援会は、一致結束し、堅忍不抜の決意をもってこの危急事態を乗り越えよ！徐俊植氏の完全釈放を断固かちとれ！白玉光ら六氏への処刑策動をはねのけ、11・22留学生ら全員の即時釈放まで共に闘おう！

5・27大使館前のデモ隊、右角は徐俊植氏

【五月二十七日全州（チョンジュ）＝本紙特派員団】徐氏の母親呉己順さん（57）＝オ・ギスン＝、妹の徐英実さん（23）＝ソ・ヨンシル＝を含む救援会関係者、報道陣ら約二十名は、外出禁止令解除の午前四時過ぎから韓国中西部の全州矯導所前に集合した。

この日で懲役七年の獄中生活にピリオドを打つ徐俊植氏の出所を今や遅しと待ち構えたのである。

京都から駆けつけた家族も、俊植氏の洋服や靴、それに好物の嗜好品の入った荷物を手にして緊張気味であった。

再三、門衛に徐氏の釈放の可否について問い合わせるが言を左右にして答えない。

しかし、午前六時十五分。所内から係官が現れ信じられないような発表を行なった。「徐俊植は社会安全法の保安処分をうけ今朝大田矯導所に移監した。もうここにはいない」

予測していたとはいえ最悪の事態に救援関係者は一斉に色を失なった。

その時、呉さんが「この日を楽しみに七年間も待ち続けたのに……」と泣き崩れた。英実さんも蒼白な表情で茫然とたちつくした。フラッシュがたかれ、テレビカメラが回る。「手も握れない。これからも収監が続くのか……」母親の嗚咽はつづく。

今さらながら、われわれの救援力量の不足が悔やまれる。

国際世論の反発を見こし、それに敢えて逆らい、刑期を終えた市民を拘束するという非道な措置に踏み切ったのは、「社会安全法」のファッショ性もさることながら、当局がなみなみならぬ決意をもって在日韓国人「政治犯」への対応を考えていることを如実に示したといえる。

この日の残酷な夜明けが全州矯導所の白い壁と鉄扉を浮かび上がらせた。

われわれはいま、この場から訴える。この屈辱と悲しみを断じて忘れるな！怒りは行動の源泉だ。徐俊植氏の完全釈放を目指し、各層は総力を救援運動に結集せよ！

【大田（テジョン）】

家族、マスコミは午前九時過ぎに、後続の救援グループは十時大田矯導所に到着した。

この矯導所は、政治犯の教化・宣撫工作で定評があり、11・22関係の金元重氏、崔然淑さんら六氏も収監されている。

家族が面会を申し込むがなかなか許可されない。KCIAらしき私服が数名救援グループの周囲を監視し、パスポートの提示を求めた。勿論、断固拒否する。

十一時、家族と三分間の面会が実現した。徐俊植氏は、釈放を控えて伸ばしていた長髪を刈られ丸坊主にされていた。席上、氏は「むこう二年間ここにいます。あせらずじっくりやります」と努めて明るく振舞い家族を落胆させないよう気づかった。

〝二年間〟というのは、「社会安全法」のなかで最も厳しい〝保安監護処分〟が適用され既に発動していることを示している。この処分は、本人の〝改悛〟が認容されるまで二年を一区切りとして無限に続く。すなわち、事実上の永久拘束を可能としている。この法が世界の治安立法を集大成した稀代の悪法との誉れ（?）高いゆえんである。

徐氏はまた「七年間もの長い間、私を注目して下さった方々や、今日ここまでいらっしゃった皆さまに宜しくお伝え下さい」と救援関係者の労をねぎらった。

徐俊植氏は獄窓に再び追いやられ、ついにわれわれの眼前にその姿を現わすことがなかった。

しかし彼もそして我々もまた、この日を結節点として新たな闘いを構築しなければならない。いつの日かの再会をめざして共同の闘いを！

怒れ更に怒れ
敢然と大使館デモ!!

徐俊植氏の「保安監護処分」適用、再収監という衝撃のニュースが伝えられるや、各地の救援会はその余震のまだ覚めやらぬ中、一斉に抗議行動に突入した。

五月二十七日午後、東京六本木の桧町公園で抗議集会とデモが決然と行われた。

これは個別救援会が大同一致して結成した「5・27徐俊植氏『刑期満了』即時釈放・『社会安全法』適用阻止五月行動委員会（略称、五月行動委）」が主催。

集会開始の午後一時半には、ニュースを聴きつけて急拠駆けつけた市民らで約五〇〇人にふくれ上った。

冒頭、司会者の「本日未明、徐俊植氏は獄外に一歩を印すことなく再収監された」との報告に、集会場は異様などよめきで、怒りの渦が巻き起った。

各団体のアピールが続く中、『徐兄弟を守る文学創造者の会』は「当局のこの攻撃にわれわれはいささかもひるむものでない。彼の良心を支えきり、必ず取り戻す」と力強く宣言した。

関西から参加した「11・22救援会」の桑原事務局長は、「救援会相互の結束を強め、この暴虐な人権無視に、われわれも最大限の取り組みを展開する」と決意表明を行なった。

集会後のデモは、かってない規模で終始敢然と取り組まれた。

ことに、大使館前では全員が立ち止まり、高らかに決議文を読み上げ、糾弾の唱和を繰り返し響かせた。

◇　◇

同日夕、文京区の労音会館で「徐君兄弟を救う会」らが中心になって記者会見を行ない、「〝刑期〟を終えたにもかかわらず再拘束するという人権無視の処分に怒りを禁じえない」との抗議声明を発表した。

「救う会」世話人の東海林牧師は「非常なショックだ。七年間のわれわれの活動はいわばピリオドを打った。しかし、今日を出発点として、また新たなたたかいを組んで行かねばならない」と決意を新たにした。

6.3東京 抗議集会 6.9大阪

去る六月三日、中央区の国労会館で「徐君兄弟を救う会」「文学創造者と読者の会」共催の「徐兄弟に自由を！『社会安全法』適用に抗議する集会」が持たれ、約二百五十人が参集した。

集会は渡韓報告を中心に今後の新たな闘いの構築をめざして開かれたもの。

まず渡韓報告がなされ、この中で韓国法務部の関係者が「保安監護所を忠清北道の清州市内に現在建設中」と述べたことが紹介され注目された。

次に、第三代のアムネスティー日本支部長に就任された新見宏氏はアムネスティー本部が〝緊急行動〟を決定したことを明らかにした。

また、和田春樹氏（日韓連委事務局長）は「今回の措置は、身をていして闘う徐俊植氏にとって、当局をそこまで追い込んだという意味でいわば勝利であろう。私も彼の信念を守る闘いに尽力する」と注目する発言をおこなった。

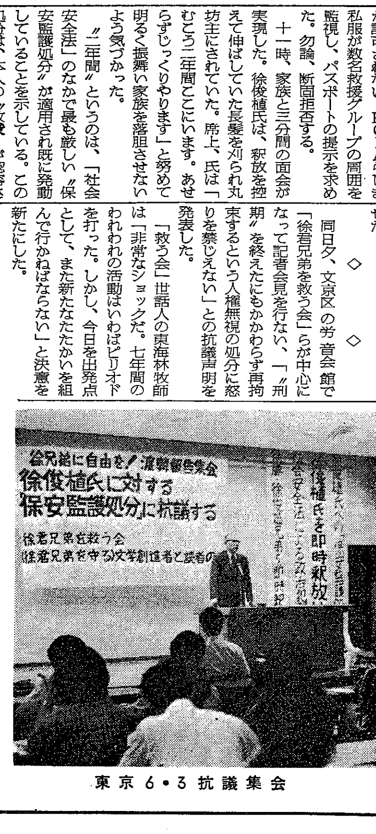
最後に徐兄弟の即時釈放を要求する決議文を採択し散会した。

◇　◇

六月九日、大阪府農林会館で「徐君兄弟を救う会」「11・22救援会」共催の『緊急抗議集会』が開かれ、約二百五十人が結集した。

集会では各団体の抗議が連続して訴えられた。「11・22救援会」の桑原事務局長は、「徐氏への今回の処分は、韓国当局が在日〝政治犯〟へ新たな攻勢的対応を示したといえる。金達男氏の帰日に見られるようにアメとムチの二者択一を迫り、家族や救援会を切り崩す魂胆だ。白玉光氏ら三氏への処刑策動をはねのけ、奮闘しよう」と力強く決意を明らかにした。

集会後、南区の韓国総領事館に向けて抗議デモが敢行された。



東京6・3抗議集会

各地でも決起

徐俊植氏の「社会安全法」適用を糾弾する声は各地で高まっている。

京都では、五月二十七日直後から街頭情宣や抗議デモを連続して展開した。

広島では「在日韓国人〝政治犯〟を支援する広島の会」が中心になり、五月三十一日下関の韓国領事館へ抗議文を突き付けた。

仙台や名古屋でも、「六氏への死刑執行阻止」と「適用糾弾」を掲げ六月十五日、七月九日に各々集会が持たれた。

特派員対象に 記者会見

六月一日、東京有楽町の外人記者クラブで、渡韓報告を中心に、徐俊植氏の即時釈放をめざす国際世論喚起の一環として特派員らを対象に記者会見がなされた。

会見には在日特派員ら約二十人が出席した。

なお、「徐兄弟の会」では、英文の「緊急アピール」と「国際署名用紙」を作成し、現在、在日欧米人や世界各地に発送を開始した。

同会では海外に友人・知人を持つ人は発送等に協力してほしいといっている。申し込みは、「救う会」または、「11・22救援会」まで。

外務大臣 善処を約束

去る五月十日、衆議員外務委員会において土井たか子議員（社会党）が、〝世界〟五月号の『徐兄弟・獄中からの手紙』を引いて徐俊植氏の釈放に政府も尽力すべきではと質した。

園田外務大臣は「（〝世界〟は）非常に胸に深くこたえた。人道上の問題として善処したい」と前向きの答弁を行なった。

二十六日の外務委員会で、園田外相は土井議員の要請をうけたかたちで、その後の経過報告を次のように行なった。「帰任中の須之部駐韓大使に指示した。大使は帰任後直ちに、朴外務部長官と会談し、（徐俊植氏の件を）人道上の問題として善処方を要請した」。

また、「今後も継続してその後の進展をみまもりたい」と。

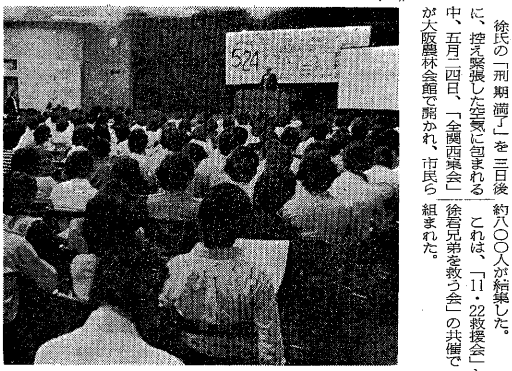
▼徐氏の完全釈放めざし▲

救援世論巻き起る

＝各界各層一斉に＝

徐氏の「刑期満了」を三日後に、控え緊張した空気に包まれる中、五月二四日、「全関西集会」が大阪農林会館で開かれ、市民ら約八〇〇人が結集した。

これは、「11・22救援会」と「徐君兄弟を救う会」の共催で取り組まれた。



5・24全関西集会・農林会館

まず、来賓として、反安保府民共闘会議々長の中江朝次郎氏が連帯の挨拶をおこなった。

次いで、亀田得治氏が弁護士の立場から「社会安全法」は戦前の"治安維持法"と勝るとも劣らない悪法だ、とその問題点を大胆に指適した。

アムネスティーの西村理事長は「彼との再会を果たすため、明日渡韓する」と報告し、満場から共感の拍手を受けた。

李哲氏の義兄・金秀顕氏は、先頃刊行された『我生きんと欲すれど』を演壇から掲げ、「弟の無実を晴らすためこの本を書いた。ぜひ読んで欲しい」と訴えた。

最後に、「白玉光氏ら六氏の死刑執行阻止」と「徐俊植氏の完全釈放」を求める韓国政府宛の電報を採択し、今後の力強い行動を誓い散会した。

◇　◇

徐兄弟逮捕七周年の四月二〇日、東京・国労会館で「即時釈放と『社会安全法』適用阻止」を訴える集会が開かれた。

集会に先だって、西村関一氏(アムネスティー理事長)や古在由重氏(哲学者)らの出席で記者会見がもたれ、学者、宗教者、文化人ら七八氏の連名による「徐俊植氏の"刑期満了"を目前に控えて」と題する"アピール"が発表された。

集会では渡韓報告がなされ、全州矯導所の教務課長の「反抗的な人間を社会に出しては国家が困る」と"社会安全法"の対象になることを示唆した発言が紹介された。

なお、この日を契機に「徐俊植氏の完全釈放」を鋭意展開するため在京の個別救援会が結束して、「5・27行動委」が正式発足した。

ビザ発給停止

西村、横路両氏に

アムネスティー日本支部理事長西村関一氏(77)は、徐俊植氏の釈放を見届けるため韓国行きの意思を明らかにしていたが、寸前になってビザ(入国査証)発給を拒否された。

去る五月二四日午後、西村氏は大阪南区の韓国総領事館に出向き、韓国の友人と親交を深めるため渡韓したい旨を告げ、ビザ発給を正式要請した。

応待した領事は、翌二十五日午後に渡すと確約した。

ところが、同日朝になってその領事より大津市の自宅に電話連絡があり「本国に照会の必要があるので時間が欲しい」とビザ発給を事実上拒否した。

消息筋ではKCIAの横やりで潰されたとみるむきが多い。

西村氏は今回の渡韓に際して、元法相の田中伊三次代議士(自民)を含む国会議員15氏の署名が添えられた韓国政府宛の「人道上の配慮を要望する」親書を携行するなど、準備を進めていたがこの突然の拒絶に失望と不満を隠しきれない。

現在、西村氏のビザ申請は完全に拒否されたわけでなく、総領事館預りという宙に浮いた状態であり、同氏は「徐俊植氏に再会したい」と渡韓への意欲をまだ捨てていない。

なお、西村氏によると、園田外務大臣も「実現へ努力する」と明言している、という。

◇　◇

去る五月十九日午後、社会党の横路孝弘代議士は韓国大使館に赴き、徐俊植氏の完全釈放にむけて韓国政府に直接働きかけるため、入国ビザを申請した。

しかし、前日の二十六日に至ってもビザ発給の見込みがないことから同日午後一時から国会内で記者会見し、「時間的リミットもあり渡韓を断念せざるをえない」と談話を発表した。

また、横路氏は「日本外務省筋からの話では、今回の渡韓を韓国政府は内政干渉といっているが、刑期満了に立ち合うのがなぜ内政干渉になるのか」と釈然としない様子であった。

なお、横路氏の「渡韓」は、かねてから「徐兄弟を救う会」らが要請していたもの。

暴虐な上告棄却

柳兄弟ら、無実の声届かず

去る六月十三日、韓国大法院は「柳兄弟事件」の関連被疑者四氏から出されていた上告を棄却し、関係者に通知した。

これで、一審時から酷烈な拷問を告発、無実を主張した四氏の刑が確定した。なお、確定判決は次の通り。【無期懲役】柳英数(29)氏、【懲役十年】金整司(22)氏、【懲役三年六ヵ月】柳成三(25)氏、【懲役三年・執行猶予五年】孫貞子(19)さん。この暴虐な上告棄却に、柳兄弟らの救援を続けてきたグループは一斉に怒りの声をあげている。確定当日、「柳英数氏を救う立命館大学の会」は「満腔の怒りをもって抗議する」と声明を発表した。また、和歌山では五月二十三日に発足した「柳兄弟を救う和歌山県民の会」が『五万名署名』を救援課題に据えて、今後兄弟の完全釈放まで幅広い運動の継続を誓っている。

「柳兄弟事件」は、昨年四月CIC(陸軍保安司令部)によってデッチあげられた。無意味な罪状を「電気・水拷問で無理に認めさせられた」と柳英数氏は一審時に告発し検事をたじろがせた。

「11・22事件」同様、定期的にこの種の事件を捏造しないと、国家や裁判制度が危うくなるらしい。

柳英数氏は苛烈な拷問ゆえ、現在肋膜炎を患い、ろくな治療を受けていないという。

「徐兄弟事件」や「11・22事件」のはざまにあって、取り上げられることの少ないこの四人に広範な救援の手が差しのべられなければならない。

個別救連絡会

大阪で開催

来る七月二十九、三十日の両日にわたって、大阪浪速区の部落解放センターで「11・22救援のため、個別救援会全国連絡会議」が開かれる。

この個別救連絡会議は、徐俊植氏の再拘束、金達男氏の帰日等にみられるように、山積する救援課題を討議し、今後の救援運動の新たな活動を促すためのもので、その成果が期待されている。

この合宿では、主に拘束者個々の獄中処遇の情報交換をはかり、待遇改善の一助へ何らかのはずみを望むむきも多く、関係者の間では具体的な共同行動を展開するべきだとの意見もある。

また、再審請求、再入国等の技術的問題に関しても、分科会のテーマにのぼるのは必至でその方面における議論を集大成した資料編の刊行なども、これを機に待望されるだろう。

「11・22救援会」は、昨年三月に開かれた個別救連絡会以後、約一年振りの連絡会であることから準備等に万全の態勢でのぞんでいる。

マスコミ、知識人

徐氏救援へ動く

徐俊植氏の完全釈放をもとめる声は、救援会だけでなく様々な分野の人たちからも捲き起った。

ことに四月から五月二七日前夜までさながらマスコミも含め徐俊植氏「問題」一色に塗りつぶされた感があった。

四月から五月にかけて、全国紙の朝日、毎日が各々写真つきでかなりのスペースを割き、この問題の重要性や「社会安全法」の非人道性を指摘した。

また、読売は一面下のコラム欄や社説で連続して採り上げ、在日韓国人「政治犯」問題を今一度日本社会で真剣に取り上げるよう訴えた。

雑誌『世界』や『朝日ジャーナル』も特集を組んだ。

◇　◇

マスコミ以外の動きとしては、去る五月二五日、労働組合の最大組織である総評(槙枝元文議長)は「徐俊植君の完全自由を遅滞なく回復すべきである」との声明を発表した。

同二六日には、青地晨、宮崎繁樹、高野雄一氏ら法曹人、評論家13氏の連署で「徐俊植氏の救済を各界に求める」声明を発表した。

また、上記13氏は、徐勝・徐俊植両氏の"人権救済"を日本弁護士連合会人権擁護委員会国際部会に正式に申し立てた。

さらに同日、「日本カトリック正義と平和協議会」(森田宗一会長)は、朴大統領および李法務長官へ「福音的見地から彼の市民的自由が完全に保障されるよう」要請する電報を打った。

自転車デモ

領事館で気勢

「死刑執行阻止」と「徐氏の完全釈放」を主課題にすえた自転車デモが、去る五月二一日、「11・22救援大阪連絡会議」主催で、東区の南天満公園で開かれ約五〇人が参加した。

参加者が一様にゼッケンをつけ、荷台にさまざまなスローガンを大書した"のぼり"を押し立てたこのユニークなデモは、市内散策の市民らにかなり注目された。

コースは、総領事館から天王寺公園までで、途中、総領事館前ではシュプレヒコールを繰り返した。

僑胞の会

○一周年集会○

去る六月十三日、大阪中之島中央公会堂で「在日韓国人政治犯を救援する家族・僑胞の会」(孫順伊会長)が、同会結成一周年集会を行った。

関西の在日韓国人や日本人救援会員ら七二〇人が結集した。

集会では、同じ在日韓国人同胞が母国で政治犯として塗炭の苦しみに喘ぐのを黙視しえない、と救援の声を更に一層あげていくことを決意した。

金達男氏帰日＝KCIA介入

救援会一斉に警戒

昨年十二月二十五日に大統領特赦で釈放された元在日韓国人政治犯金達男氏(31)＝長野県小県郡、元民団役員＝は、去る五月十二日、三年振りで帰日を果たし同夜長野県の実家に落ち着いた。

「金達男事件」
一九七五年三月KCIAにより金達男氏以下八名が逮捕される。
裁判で金氏は罪状をほぼ認め寛刑を訴えたが、七六年四月死刑が確定。七七年三月、「無期」に減刑。光州矯導所に下獄中の昨年クリスマスに「大統領特赦」で釈放。
これは、在日韓国人「政治犯」では始めてのケース。
そして、去る五月十二日に帰日した。

金氏は、出発前ソウル金浦空港で記者会見を行ない、「釈放に尽力した関係者及び朴大統領に感謝の気持ちで一杯だ。今後は生れかわったつもりで祖国の発展に寄与したい」と語った。

同席した金氏の裁判時の担当弁護士呉制道(オ・チェド)氏は「今回の措置はあくまで例外中の例外だ」と他の在日「政治犯」に波及するのではという見方を否定した。

消息筋によると、金氏の再入国の経緯は四月中旬にソウルの日本大使館に入国査証が申請され、五月初旬、法務省は特別在留を認めた。期間は一年間。

徐俊植氏の刑期満了を間近に控えたこの時期の「帰日」は救援運動の瓦解と分断、家族への不安と動揺を意図しているのは明らかだ。

それを裏付けるように金氏は五月二十五日、東京で民団関係者らと共に記者会見に臨み「救援運動は獄中の政治犯を不毛の闘いに追いやっている」と無実を主張する「政治犯」への敵対を露わにした。

また、各地で帰日報告を兼ね大々的な反共キャンペーンに乗り出すことを示唆した。

このKCIA・民団一体となった攻勢に、救援会・家族筋では一斉に反発している。五月二十三日、「在日韓国人政治犯家族協議会」(李在永会長)と「在日韓国人政治犯を救援する家族僑胞の会」(孫順伊会長)は連名で「いったい誰が、肉親を政治犯弾圧の張本人であるKCIAの手先きになって戻って来ることを望むであろうか」と抗議声明を発表した。

また、本年二月、会員がソウルで金達男氏と長時間の会見に成功した「李哲氏を救う全国連」(事務局熊本市)は、先頃その機関紙上で長文の反駁文を明らかにした。

早速策謀を開始

"はしやぎ過ぎ"に疑問も

解説

昨年暮れの「金達男氏釈放」の一報以来、大方の救援関係者は今日の事態を予測していた。が、やはりその波紋は小さくない。本年一月六日、「11・22救援会」は談話を発表し、この特赦の意図を明確に指摘した。(本通信八号)

しかし、帰日後の金達男氏から語られる言葉が即"事実"として喧伝されるのを見るにつけ、われわれもそのような公式的な「見解」だけで対応するのは困難になってきた。幾つかの疑惑をあげる。彼の釈放をめぐって実兄金元東氏(43)の奔走をあげる関係者が多い。ソウルで彼が四億円ばら撒いた話は有名である。本年二月の「李哲救」の会員と金達男氏との会見(以下"ソウル会見"と略す)で達男氏自身それを肯定している。また、自民党議員が尽力したと述べたが、彼はその名前を明かさなかった。その議員との金品の収受即ち贈収賄罪の成立を危惧したからだ。金元東氏は、達男氏の逮捕後に長野県民団の財政部長に就任しているのはこのことを裏付けている。本年初頭、金元東氏は救援関係者との電話で、さも言いにくそうに「(釈放をめぐって)いろいろあったんですよ。今は言えないけど(弟が)帰ってきたら洗いざらい話しますよ」と内幕の複雑さを明かした。

しかしながら、金元東氏は現在も口を噤んだままである。当り前だ。この人のよい兄さんが想像したほどKCIAは甘くない。達男氏は二重三重のたがをはめられその挙動はすべて当局によってコントロールされている。居直りなど断じて許されない。

金達男氏個人の浮薄な態度も言及されねばならない。先の"ソウル会見"で、達男氏は「李哲救」の会員に救援会会議の出席者の動向にしきりと探りを入れていた。また、「李哲氏は"北"に行っていない」との会員の言葉に「北に行ったか行かないかは問題でない」と多くの「スパイ事件」が単に"政治的"ショーに過ぎないことを知っている。にもかかわらず、「政治犯」の家族の名前を挙げ「帰ったら会うつもりだ」と救援運動の分断と瓦解に率先して取り組むことを明言した。KCIAと周到な作戦計画を練り、その尖兵として彼がこの日本に送り込まれたのは自明の理である。康宗憲氏が金達男氏のことを「ここ(ソウル拘置所)では彼は"ホラ吹き"で通っていた」と語ったのはムべなるかなである。去る六月二十二日。民団の大会が東京日比谷野外音楽堂で開かれた。冒頭、現われた金達男氏は大極旗(韓国国旗)を左右に数回となく打ち振った。次に聴衆に向って「大韓民国万才」「朴大統領万才」を三唱した。彼の軽挙妄動を非難するのはたやすい。しかし、その精神構造を徹底的に痛ぶり彼をそこまで追い込んだ権力の黒い魔手には正直いって恐懼する。われわれも心してかからねばならない。

日本⇔韓国
共に歩み共に闘おう
ドキュメント37時間（上）

全文二万字の本ドキュメントは、「11・22通信」編集部の総力をあげて製作された。五月二十六日、午前十一時、ソウルのアメリカ大使館の場面を皮切りに、五月二十七日、午後十一時五十五分の摂津富田教会まで、この〝歴史的な一瞬〟の前後三十七時間のルポルタージュである。この時間帯に救援会に関わる人たちが、何を考え、どう行動したかを記した。

この運動を支えるさまざまな角度からの多様な視点を大方の読者に披瀝することによって、更に大きな救援のうねりを形成する一助となることを、われわれは意図した。

しかし、KCIAを始めとする権力との相克もあり、完全な内実を全てさらけ出すことは当初から無理であった。

ゆえに、このドキュメントは完全なノンフィクションでないことを断わっておきたい。なお、本ドキュメント製作にあたり、心よくインタビューに応じて下さった救援会員の諸兄姉に紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

（文中、「救援会」は略称を使用させて頂きました。登場人物の最初の紹介時に、姓名が記されている人は、全て実名で、姓のみの人は仮名である。但し、韓国の日本人特派員の五氏は、いずれも姓のみであるが、実名である。敬称は略した）

五月二十六日、午前11時。ソウル。

釜山経由ソウルに着いたマーシャルは、市内散策に向うジュリアと別れて世宗路のアメリカ大使館にやってきた。

大阪を出立する時、見送りの面々から「全州の前に大使館の感触を確めるように」との助言を受けたからだ。

人権担当のラ・マザーは帰国中であった。S・ウェルナー一等書記官が応待した。まだ若いが一見して職業外交官という感じ。

マーシャルは手短かに述べた。徐俊植の刑期満了と「社会安全法」のことを。そして、関西の同国人代表として彼の釈放を見屆けるため来韓したことを。

ウェルナーは刑期を了えても釈放されない「法」に、初めて知ったと驚いてみせた。

傍らの電話で、顧問弁護士にその「法」の有無を問うた。「聞いたことがない」という答えであった。しかし、五分もしないのにベルが鳴った。くだんの大使館付き韓国人弁護士は、先ほどの返答が間違っていたことを詫びた。

ウェルナーは、「私も関心があります。明日の結果を報告して欲しい」とマーシャルの手を握り、繰り返した。

ソウルの暑熱は異常なほどであった。その中、ジュリアが彼を待っていた。

12時15分。大田発光州行きのバスの車中。

「11・22通信」の臨時特派記者として、二十四日から来韓していた横瀬は、いまは差し入れ行脚に大わらわであった。今朝一番のソウル発釜山行きの特急に乗り込み、大邱に金五子の差し入れに行く吉久保と別れ、単身大田矯導所に来た。

日本を発つ前、ここが一番難しいと聞かされていて、緊張したが割合いスムーズにいった。それでも本を入れるのは渋られてかなり骨が折れる。不承々々笑顔を絶やさないようにした。これが以外と功を奏した。

前日のソウル拘置所でもそうであったが、日本から女一人差し入れに来るのが珍しいらしくいろいろ問いかけてくる。もっとも「開口一番、「金元重の恋人か」には閉口したが…。

バスは一路光州に向って走っている。全州の辺りだろうか。山頭は春がすみにけぶり、ぼやっと呆けたようだ。横瀬は空腹を感じたが、すぐに静かな眠りにおちた。

午後12時半 ソウル郊外のバスターミナル。

「徐君兄弟を救う会」の野村と清川が乗り込んだ高速バスは、いままさに動かんとしている。全州まで3時間15分。午前中は、記者クラブを訪れ、明日の取材を要請した。色よい返事を貰えたのは共同の小野田と毎日の前田の二人であった。多分駄目だと思った朝日の小栗は、やはり駄目。敢えて無理強いしなかった。ソウルの街並をみながら、野村はやっとこの瞬間が到来したことに少なからぬ感慨を禁じえなかった。

横路、渡韓を断念

午後1時5分。東京千代田区議員会館。

社会党の横路孝弘は、記者団を前に〝渡韓断念〟の経過を淡々と述べた。「残念ですがビザがおりず、私としてはきわめて不本意です」。釈然としない様子がありあり。

「立ち会うのが、何ぜ内政干渉だ」と最後は記者に同意を促すようであった。10分ほどで会見は終った。

午後2時半。東京、東水労会館。

「早稲田徐兄弟救う会」の島田恵司は、その頃お茶の水界わいの東水労会館にいた。青インクが裸の二の腕にベットリついている。

明日の集会のたれ幕と横断幕の製作に余念がない。「白玉光救」の高島も真剣な表情で刷毛を操っている。

冷房のない部屋はムンムンするが、島田は充実していた。彼はこの集会に、ここ二カ月程全精力を傾注していた。

『何としても成功させたい』――、いま彼の一念はそれだけである。

奈川、ソウルへ

午後3時45分。ソウル金甫空港。

大阪国際空港を、2時15分に飛び立ったJAL九六三便はいま着陸態勢に入った。

この便には、「11・22通信」のもう一人の特派記者奈川が乗っている。本来なら、この便にはアムネスティーの西村関一理事長もいる筈だったのだが、彼は横路同様寸前になって入国査証の交付を拒否された。今回の徐俊植氏の「刑期満了」をめぐって、韓国当局はかなり神経をとがらせているのがわかる。

四回目の韓国詣でだが、奈川も気を引き緊める。

一路、全州へ!!

午後4時45分。全州矯導所前。

「徐兄弟救」の野村と清川は、旅装を解くのももどかしく矯導所にやってきた。今日の全州一番乗りは彼らだった。

まず差し入れに一〇〇〇W入れる。彼の存在を確認するためだ。刑務官に、「面会したい」と尋ねると、「俊植は市内の検察庁に行っている」とニベもない。最後のツメの段階に入っていることが、ひしひしとわかる。

明日の出獄の状況を聞き出そうとするが、一切答えない。仕方がないので野村らは、徐俊植が帰ってくるまで待つことにした。

午後5時10分。清州バスターミナル。

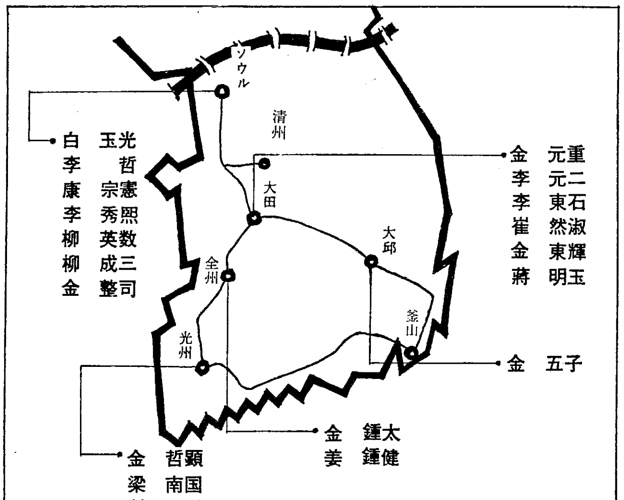
マーシャルとジュリアは、バスを降りた。長時間のバス旅は疲れる。ターミナルの案内員に、落ち合い場所の全州第一ホテルの道順を尋ねた。案内員は明瞭な英語で、「この町にはそんなホテルはない」。今度はジュリアが「この町に刑務所はありますか」「ノー」。二人は顔を見あわせた。そしてやっと要領をえた。二人が着いたのは忠清北道の「清州（CHEONGJU）」で、目的地の全羅北道の「全州（JEONJU）」ではなかった。地名の韓国式発音が似ていたので、ソウルを出立の際、係官が間違ったバスを指示したのだ。二人は一変に汗がふき出し、その場に座りこんでしまいたい心地だった。が、気を取り直して、今度は間違いなく全州行きのバスに乗り込んだ。

午後6時15分。ソウル発全州行きバスの中。

金甫からタクシーを飛ばし、ターミナルに到いたのが4時半少し前だった。このタクシーの運転手と一悶着あった。料金メーターの一五〇〇Wを払うと、更に一〇〇〇W追加しろ、という。とんでもない。三年間、世界中をほっつき歩いた奈川にとって、外国でこういう経験をするのは珍しくない。知ってるだけの韓国語とブロークンな英語でまくし立てた。運チャン氏も負けていない。人だかりがする。それにバスの時間も切迫してきた。とうとう奈川は根負けした。敵は意気揚々と去っていったがソウルではこれ位たくましくなければ生活できないのだろう。

四〇年振りの旱魃（かんばつ）とかで、バスの車窓から望む農村は田植えが順調に進んでいないようだった。学徒動員で駆り出された、学帽にシャツ姿の高校生や大学生が、汗だくになって井戸を掘っていた。その同じ光景が、表われては消え、消えては表われた。

奈川はそれを見ながら、康宗憲氏の起訴状に「彼が夏休みの勤農奉仕時、同じソウル大の友人に不穏なことを語った」という一節を想い出した。それが、「スパイ罪」になるのだから……。バスの速度は一〇〇K近い。



「11・22事件」の拘束者らの収監地

午後6時半。東京、高田馬場駅前。

「五月行動委」の行動情宣でビラ撒きが行われていた。五時過ぎから始められ、現在は約十五人。「金元重救」と「早稲田」が主である。早稲田のキャップ島田も、幕作りを終え駆けつけた。「徐兄弟文学創造者救」の藤林も来ている。栃木に家がある藤林は、主人の理解もあってもう一週間、都内の友人宅を転々としながら活動三昧の生活だ。

7時過ぎ情宣は終る。主だったメンバーは南池袋の「全国会議」の事務所に向う。明日の具体的行動の最後の戦術会議だ。

26日夕 徐俊植氏 検察庁に呼ばる

7時15分。全州矯導所前。

徐俊植はまだ帰って来なかった。6時半頃家族の呉己順と徐英実がやってきた。で、いまは野村、清川を含め四人が所在なげに待っている。陽は沈んだが、西の空はまだ夕照えの盛りであった。そろそろホテルに皆が集まる頃だ、と野村は思った。

その時である。灰色の大型バスがエンジン音を響かせ近ずいてきた。一同は緊張する。バスの中に二十人程乗っている。眼を凝らし、手を振ったが、バスはスピードをゆるめず鉄のゲートをかいくぐって所内に消えた。

われわれからは見えなかったが、徐俊植からは見えた筈である。一目、彼の元気そうな顔を捉えたかったが、今日はやむをえない。家族も消沈していたようだが、明日に期待を繋いでホテルに戻った。

最後の薄明が、意志あるもののようにその瞬間、かき消えた。

午後8時5分。京都右京区勤労会館。

「徐俊植氏の社会安全法適用阻止」を掲げてここ勤労会館で集会が開かれていた。

京都の個別救援会らが結束して「署名活動」を展開してきたが、その決起集会であった。狭い会場だが、ビッシリ詰まり一〇〇人はいるだろう。折しも、「11・22救」の桑原重夫事務局長が流れる汗もふかず熱弁をふるっていた。「（明日の結果は）いろいろな見方があるがわれわれとしては、最悪の場合を想定してかからねばならない」と強調した。

8時30分。全州第一ホテル。

部屋室五十五、全州きっての近代ホテルである。この日、フロントに立っていたマネージャー氏は眼を白黒させていた。得体の知れない日本人グループが次から次へと押しかけてくるのをけげんそうな面持ちで見つめていた。

ソウル―大田―光州―全州と、今朝から六〇〇Kを走り廻った横瀬は、風呂上りの上気した顔で、午前中大田で別れた「金五子救」の吉久保と今日一日の互いの収穫を披露しあった。大邱矯導所の金五子への差し入れも順調であった。横瀬も、光州矯導所の体験を話した。京都で韓国語講座に通う横瀬のカタコトの韓国語に、矯導所の役人が「上手い」とほめてくれたのが嬉しかった。言葉はやはり、相互の理解に必要不可欠なものだ、と吉久保は横瀬に合いづちを打った。

「疲れた、疲れた」を連発して奈川が着いた。この日の事実上のキャップ格の「徐兄弟救」の野村はご機嫌だった。毎日と共同通信だけと思っていたソウルの特派員グループに時事通信の中村とJNNの深谷が、ソウルから専用車を飛ばして駆けつけ加わったからだ。深谷は重そうな撮影機材を助手と二人で運びこんでいた。

9時過ぎ、マーシャルとジュリアの外人ズッコケ二人組が、大仰な身ぶりでアクシデントの顛末を語りながら入ってきた。

これで全員そろった。

救援会関係―九人（米国人二人を含む）。家族―二人。マスコミ―四人（他にその助手及び運転手五人）。

昼間の暑さが嘘のように、帳（とばり）がすっかり辺りを覆い尽した。

記者ノート 〈全州市〉韓国中西部の全羅北道の道庁所在地。人口三十万の商都。近郊でとれる全州米をベースにしたピビンバク（混ぜご飯）は、韓国一の定評がある。街には往時の百済文化の遺跡がいまでも見られる。昨年、ダイナマイト満載の貨車が爆発し、未曽有の被害を出した裡里（イリ）市はここから近い。

その前夜 最後の打ち合わせ

午後10時15分。大阪中央郵便局前。

明日の東京行動に参加する前夜発グループのバスが一台止っている。

その側で「阪大白玉光、許景朝救」の岸田早苗がひっきりなしにタオルで汗を拭っていた。早苗などという名前から妙齢の婦人を想像してもらっては困る。昭和一ケタ生れ、五人の子持ち、一〇五センチのビール腹を抱えて豪放に笑いとばすのが、このオッサンの特徴である。

「11・22救」で、個別救、団体担当の松代が見送りにきた。彼は明日発つ予定。

松代は岸田に「動員はどの位」と尋ねた。「このバスで五〇、現地合流が二〇まァ七〇人というところかな」。

傍らを学生らが岸田に目礼し、バスに上り込む。岸田は「阻止共闘」の議長も兼ねている。

そのせいか彼は学生グループには信望が厚い。早稲田の島田同様岸田もこの東京行動

に、全精力を傾けてきた。このための上京回数は数え切れない程だ。「救援」と声がかかると東奔西走する岸田に、つい先ほども、妻の寛子は、「またですか」と最近ではいいかげんに呆れ返っている。こんなことだから、万年講師といわれるのかも知れない。

松代と岸田の話は続く。「島田氏、頑張っているかな」、岸田は小声で呟いた。

10時半。東京南池袋。全国会議事務所。

岸田の懸念は当っていた。明日の戦術行動をめぐって会議は紛糾していた。8時から始った会議は、主に島田と「全国会議」事務局長の吉松繁の間で推移していた。集会、デモの細則が事前に周到に準備されておらず、集会前夜になっても沓として、なかなか意見の一致をみることができなかった。

大使館前で立ち止る、など従来なかったことだけに、一線を超えることに吉松は若干のためらいを感じた。11時過ぎ、やっと妥協点を見出した。「デモの責任者(島田)に一任する」と吉松は言明し、島田も了承した。

5月27日

全州、大阪、東京—

深夜の殆動始まる

11時。全州第一ホテル。

野村の部屋で、明日の予定の打ち合わせ会議を開いた。九人全員が出席した。

野村は、いままでの状況を報告し、「明日矯導所側がどういう態度をとるか全く予測がつかない」と結んだ。具体的に明日何時に出発するか、という問題になった。議論百出したが結局6時に、ということに落ち着いた。

野村は、別室で待機していた記者団にその時間を提案した。しかし、記者団は「せっかくここまで来たのだからしんどいけれど4時にしましょう」という逆提案をしてきた。その二時間の間に、決定的なことがあれば来た甲斐がない、また外禁令の4時まで移動するのは困難、と読んだからである。救援グループも4時を了承した。

「11・22通信」特派の奈川と横瀬は、取材の手順と差し入れの打ち合わせを綿密にした。前半を横瀬が、後半を奈川がする予定であったが、40冊近い書籍は横瀬がほとんど済ませていた。奈川は領置金と食料を中心に差し入れることにした。

疲労おし頑張る

五月二十七日、午前0時15分東京都内。

「徐兄弟文学創造者救」の藤林は、一人深夜の地下鉄に揺られていた。会議疲れというより慢性疲労かも知れない。でも、明日でひとまず結着がつき、家に帰れると思うと、栃木の自宅に残してきた三才の一人息子に無性に会いたくなった。豊島区の友人宅に着いた時、午前一時を回っていた。

ぜひカンパを!!

午前0時50分。滋賀県、名神高速バス内。

午後11時に大阪を出発したバスは、途中京都に寄り十三名を加えて名神高速道路に再び入った。バスはほぼ満席である。

後部座席の一角に「11・22救」会計担当の倉持がいた。彼女は予備灯のかすかな灯りの下で、小器用に電卓を繰っていた。ひとしきりの作業を終えると彼女は「ああ、赤字だわ」と吐息を洩らした。一昨日、大阪農林会館の「5・24集会」の収支計算をしていたのだ。

通常、集会会計は赤字にならないが黒字にもならない、といわれている。しかし、六万ほどの赤字になった。「徐兄弟救」との共催だが、小所帯の彼らに折半など言い出せそうにもない。「11・22救」が負担せざるをえないわ、と倉持は思った。

倉持には、もう一つ気懸りなことがある。それは四、五日前外人グループの代表格のマイルズから電話があった。「われわれの代表として、二人を韓国に派遣させたいが、片道の飛行機代位援助してくれないか」というものだった。

彼女は即答せず「考えましょう」と答えておいた。「5・24集会」で若干の黒字を期待してのことだった。が、当てが外れた。

「11・22救」の会計から横瀬、奈川と二人の特派記者に既に差し入れ費用も含めて二〇万出費している。底をつきかけた会計簿をみると頭が痛い。「お金に無縁な私が何ぜこんなに悩むのかしら」と。

バスは大垣のインターを過ぎた。硝子窓ごしに漆黒の闇を覗きながら、韓国グループは今どうしているのかしら、と倉持は思った。バスはひたすら東上する。

午前2時30分。東京、全国会議事務所。

島田と「催哲教救」の波岡は、明日いや今日の集会の具体的な作戦要綱の打ち合わせ作業を、会議後からずっと行っていた。

発言順、デモ指揮及び編成。突発的事態の対応等、かなり綿密な作業であった。

二人共、疲れと睡魔でフラフラしながら頑張った。この技術的な労力を惜しむと、後で取り返しがつかなくなることを二人は知っていた。三時前、やっと了えた。二人は、そのまま事務所に泊ることにした。ここには畳の部屋と布団もある。

・・・
明日に備え……

午前3時。大阪高槻市、摂津富田教会。

この時間は桑原の就寝時間でもある。万と積まれた書庫のような部屋で、桑原は原稿の執筆に精を出していた。

時計が3時を打つと、ペンを置いた。最近、医者から血圧が高いと言われ、アルコールは控えている。窓を開けるが星はみえない。今日も暑そうだな、一雨欲しい、と思った。

午前4時—外禁令解除

全州矯導所へ向う

午前3時半。全州第一ホテル。

リリリン、リリリン——。モーニングコールがけたたましく鳴り響いた。奈川は跳ねるように起きた。そして、各部屋にテレホンコールをかけた。「時間だ、起きろ!」——。

3時50分。横瀬と吉久保が階下に降りて行くと、大方のメンバーが既に揃っていた。まだ真暗闇だ。二十人ほどの人間が一斉に、外出禁止令解除の四時を目途に起き出したものだから、ホテルのマネージャーは面喰った。

チェックアウトの救援会員らに「どこに行くのですか」「何があるのですか」「みなさん、同じですか」と英語と日本語で問うが、誰も答えない。マネージャーには、これから何が起るか予想もつかなかったろう。

タクシーが一台、ホテルの前に止った。家族らが乗り込む。後続のタクシーが来ないので、業を煮やした会員らは四台の特派員の車に便乗する。

全州矯導所は、街外れの車で十分ほどの所に位置している。

市内を五分走ると、未舗装の片側一車線の道路に入る。もうもうと砂煙をあげて車は進むが、突然急停止した。検問だ。奈川は一瞬緊張した。二人の兵士が銃を背に、パスポートの提示を求めた。一人は軍服を着ていることから陸軍の歩兵であろう。もう一人は私服のような感じだったので民兵組織の郷土予備軍の一員かも知れない。

共同通信の小野田が、取材の目的を告げるとすんなり通してくれた。冷や汗をかいた。

その頃十分ほど先行した、家族のタクシーは矯導所に到着する寸前であった。その時、前方のゲートから黒い小型のマイクロバスが出現した。

タクシーが止ると同時に、バスはその左側をするりと走り抜けた。左側の座席にいた徐英実は、バスの後部座席でこちらを振り返った一人の男を見た。白い囚人服、細面の顔立ちで眼鏡をかけていた。彼女は、本能的に「兄さん」と想った。しかし、確かめるすべは無い。

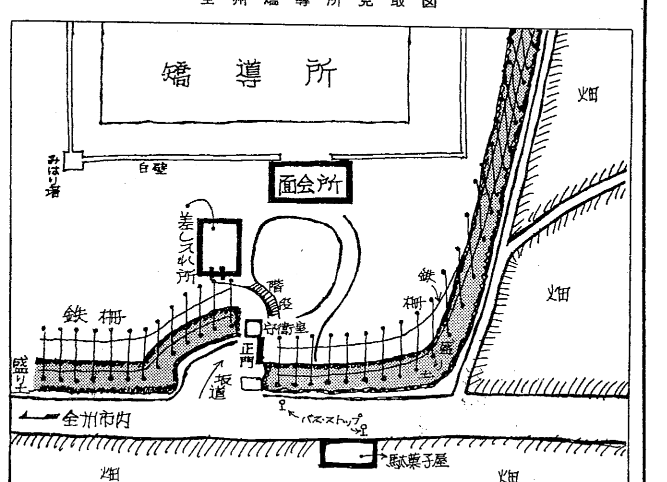
全員が矯導所前の広場に集合した。まず奈川ら三人は裏門に回った。先程のバスの人物が徐俊植と特定できない以上、万全の態勢を布かねばならない。

夜が明ける気配は全くなかったが、門衛室から洩れてくる灯りは周囲の白壁の塀を浮かび上らせていた。

再三、再四門衛に問い合わせるが、「わからない」の一点ばりで取りつくしまもない。

5時半頃、突然照明用のライトが光り、深谷がテレビカメラを回し始めた。これには一同びっくりした。ことに門衛は、口をアングリ開け呆然としていた。さすが、本職は根性がある、とにわか記者の横瀬は思った。矯導所は一級の保安施設で撮影が禁止されていることは、深谷は百も承知の筈だ。プロ意識なのだろう。皆、まんじりともせず待ち続けた。

全州矯導所見取図



背広は誰が着る

午前6時。ちょっとしたハプニングがあった。通用口のフェンスが開き、一人の男が表われた。風呂敷包み一つを小脇に抱えたこの男に、突然、一時間前から待っていたおばさんが声ならぬ声をあげてかけ寄った。

二人の母子は、しばし涙にくれていた。気を取り直した母は自分の荷物から服や靴を出し、その場で着換えさせた。息子はこちらを見て少しためらったようだが、母に従った。

横瀬は、息を呑んでこの光景を凝視した。そして彼女は、呉己順、徐英実母娘の表情をうかがった。この母娘にとって、これは羨しい光景でない。残酷なシーンだ。呉己順の荷物にも真新しい背広や皮靴が入っているのを、彼女は知っていた。

徐氏既に大田へ

暴挙に怒りの声!

運命の時は来た。

門衛が所内から庶務課の役人を連れてきた。一斉に彼のもとに、にじり寄った。少し臆したふうであったが、この役人は短く述べた。

「徐俊植はここにいない。『社会安全法』の保安処分を適用され、大田矯導所に移管された」。信じられないことだった!ありうべからざることだった。横瀬は、「保安処分」と「大田」の単語を判然確認した。全てを諒解した。表情をめったに変えない野村の顔が硬ばった。この七年間、彼の生きるすべは徐兄弟救援と切り離すことができなかった。

そのショックもひとしおであろう。しかし、もっともショックの烈しかったのは、言うまでもないがこの母親である。役人に再度のダメを押されると、呉己順は人目もはばからず泣き出した。七年間、この母は二人の息子の軌跡を追って、母国とはいえ彼女にとっては針の筵(むしろ)ともいうべきこの故郷を彷徨した。際限なき流摘の旅の一端は今日断たれる筈であったが…。

「七年も入ったのに、このまま出られないのか」と彼女は無念を抑えることなく泣いた。

全州矯導所、呉己順・徐英実母娘

徐英実は蒼白な表情で一言も発しなかった。毅然としたその面貌と真一文字に結んだ口唇に彼女の想いが凝縮されていた。

ライトが截然とその一角を浮かび上らせ、テレビカメラが再び非情に向った。

今度は、門衛が怒った。興奮して突っかかって来るが、深谷はカメラを離さない。

広場の左脇の壁に沿って薔薇の花が盛りであった。花は黙して語らぬが、この仔細を覚えるがよい。

6時半。黎明の中、裏門で待機していた奈川らも戻った。奈川も含め、みんなはこの容易ならざる予想外の顚末に、どう対処してよいか判らなかった。

野村に家族、それに四社の特派員は大田に向けて出発した。矯導所前には七人が残り、会議が開かれた。大田に移動することに誰も異論を挟まなかったが、困ったのは「11・22通信」特派の横瀬と奈川である。奈川は大阪を発つ前、天満の喫茶店で「11・22救」渡韓担当の村田と会っていた。その時奈川は「村田さん、もし取材と差し入れのどちらかを優先する時どっちにします」と尋ねた。村田は「両方とも大事だ」と、くだらんことを聞くなとの態度であった。奈川は苦笑しながらその時のことを想い出した。

全州の差し入れも必要だし、当面ソウルに戻る予定がないので、後ろ髪引かれる思いだが奈川が残ることにした。

公衆電話でタクシーを呼び、六人は全州のバスターミナルに戻っていった。賑わいを示しているターミナルから六人は大田行きの高速バスに乗った。8時15分である。

午前8時10分。東京駅前。

前夜、関西を発ったバスは東京駅前に着いた。この時点、全州矯導所前のニュースはまだ入っていない。集会開始まで、また間があることから、食事のため、一時解散することにした。(六面下段へつづく)

	氏名(収監番号)	判決	差し入れ品目 本	食べ物	領置金
ソウル拘置所	白玉光 (5986)	死刑	「数学物語」(矢野健太郎) 「アインシュタイン」(B.G.クズネツオフ)		5,000. (単位:ウォン)
	李哲 (966)	死刑	「人間のしるし」(モルガン) 「文明の生態史観」	A	4,000.
	康宗憲 (677)	死刑	「青春の門」(五木寛之) (注.7) 「ゴーリキ全集」「高村光太郎詩集」		3,000.
	李秀煕 (1135)	懲役7年	(注.1)	A	3,000.
	柳英数 (4200)	無期懲役	(注.2)		3,000.
	柳成三 (4014)	懲役3年6月	「知と愛」(H.ヘッセ)		3,000.
	金整司 (4000)	懲役10年	「魔の山」(T.マン)	A	3,000.
大田矯導所	金元重 (3914)	懲役7年	「山一研究と随想」(大島亮吉) 「山のパンセ」(串田孫一)	B	3,000.
	李元二 (3962)	懲役5年	「耶馬台国はなかった」(古田武彦) (注.3) 「ハックルベリーの物語」(M.トゥエイン)	B	5,000.
	李東石 (3827)	懲役5年	(注.4)	B	3,000.
	崔然淑 (3896)	懲役5年	「世界の歴史」	B, C	3,000.
	金東輝 (4116)	懲役4年	「トルストイの生活」(ロマン・ロラン) 「知と愛」(H.ヘッセ)	B	5,000.
	蔣明玉 (3876)	懲役3年6月	(注.5)	B	5,000.
全州	金鍾太 (424)	懲役10年	推理小説(松本清張) 「ホモルーデンス」(ホイジンガー)	D	(注.6)
	姜鍾健 (1053)	懲役5年	(注.1)	D	5,000.
光州	金哲顕 (3129)	無期懲役	(注.1)	E	5,000.
	梁南国 (2984)	懲役10年	「ファースト博士」(T.マン)	E, F	10,000.
	趙得勲 (3083)	懲役7年	「人間の歴史」、「偶然と必然」(J.モノー) 「羅新盤のない旅行者」(D.モルガン)	G	8,000.
太邱	金五子 (2666)	無期懲役	「イプセン名劇集」、「望郷と海」(石原吉郎) 「バビロンの流れのほとりにて」(森有正)	H	5,000.

11・22救、個別救
友人へ差し入れ成功

「11・22救援会」は個別救援会と連携し、韓国内五カ所の矯導所に分散移監されている被救援対象者二十一氏に六月二十四日－三十日まで複数の会員で差し入れを行なった。(三面の地図参照)

今回は、約四十冊ほどの書籍を中心に、下着、領置金、菓子、果物等を入れほぼ成功した。今回の差し入れ行で、姜鍾健氏が太田から全州矯導所に移管された事実を確認した。その他、ソウル拘置所の金整司氏と李秀煕氏に「11・22救援会」として初めての差し入れを行なった。

なお、11・22関係者以外ではソウル拘置所の崔哲教・姜宇奎・陳斗鉉の三氏に領置金の差し入れを行なった。三氏はいずれも死刑が確定している。

光州の閔香淑(李哲氏の妻)さんにはE相当の食料品と薬を入れた。

「11・22救援会」では、継続的な差し入れを維持しうるためのカンパを多くの人が寄せてくれることを願っている。また、金品と本人を特定しての差し入れも受けつける予定。

◇　◇

【食べ物】

A、	トマト、砂糖菓子、玉子	1,880W分
B、	リンゴ、玉子、パン	2,955W分
C、	ヨーグルト、パン、玉子	2,000W分
D、	玉子、菓子	1,250W分
E、	玉子、パン、菓子	2,100W分
F、	ドーナツ、玉子、菓子	3,180W分
G、	カンパン、玉子、トマト	4,200W分
H、	果物、菓子	3,000W分

(注1) 李秀煕、姜鍾健、金哲顕の三氏に書籍が入らなかったのは技術的な問題でなく、われわれのケアレス・ミスです。申し訳ありません。

(注2) 彼には、本と食べ物が拒否されました。理由は定かではありませんが、その直後の家族のは入ったそうです。

(注3) 著書、古田武彦氏は、李元二氏の高校時代の恩師。

(注4) 規定量(十冊)入っているので拒否されました。

(注5) 彼女は韓国生れで、日本語の本を読むのが困難。次回は韓国語の本を入れる予定。

(注6) 規定額入っている、ということで拒否される。

(注7) 読禁処分(五面参照)のため彼の手もとに届いていない。

康宗憲　処遇依然変化せず
"救援運動に期待する"

徐俊植氏の再収監や金達男氏の帰日等で波乱ぶくみの情勢が続く中、11・22関係の家族や救援会でも拘束者らの状況が更に悪化の兆しを示すのではと憂慮している。

六月に入りソウル拘置所の康宗憲氏と太田矯導所の金元重氏の動静の一端が伝えられた。

康氏は既報のように(通信九・十号)、三畳半に六人押し込まれていることや、終日手錠を外されない状況等は依然改まっていない。加えて今回は規定が変わったとかでタオルの長さを従来の半分にするよう要求された。更に許せないことは拘束者唯一の楽しみともいうべき読書が康宗憲氏に禁止された。

これは康氏が他の拘束者らと所内で禁じられている書籍の貸借をおこなったというかどで課された。期間は五月初旬から八月初旬までの三ケ月間。

六月二日は父親の康圭禅さんと課長室で久方振りに特別面会が実現した。康氏ら父子は逮捕以来数年振りで手を握りかわすことができた。

拘置所の劣悪な待遇にも、康氏はその堅固な志操を崩さず「韓国政府は、われわれ『政治犯』の死刑囚が死のうが生きようが関心を持っていない。むしろ早く処刑したがっている。しかし、日本の世論の関係で執行できないでいる」と語り、所内の緊張と救援運動への切なる期待を伝えている。

われわれは彼の期待に早急に応えてゆかねばならない。

第二審時の金元重氏

待遇悪化の一途
金元重氏

本通信第七号(昨年七月三〇日付)で太田矯導所に下獄した金元重氏の転向強要の実態と獄中処遇の異常性が指弾された。

それ以後も非人間的な転向強要は手をかえ品をかえ執拗に繰り返され、あくまで"峻拒"する金元重氏へ密室の弾圧が今なお継続して続けられている。

日常、金元重氏への担当官の恫喝や面罵は珍しくない。

面会の家族にも「彼を説得しないなら面会は許さない」などと声高にあたり散らす始末だ。

獄中処遇も以前の雑居房から本年に入り独房に移された。

書籍や毛布などが拒否されるなど、救援会では一段と不安の声をつのらせている。

最近では家族間の通信もままならない。そのため、入院中の母親の病状の好転を伝える手紙が本人の手に落掌せず、金元重氏は徒らに不安と焦燥の日々を過した、という。

「金元重君を救援する同窓生の会」では、徐俊植氏が同じ太田矯導所に移管されたことから、もっと熾烈な転向攻勢がなされ、彼の肉体と精神をさらに苛むのではという危惧を抱いている。

同会では、多くの人が金元重氏の獄中の闘いに連動し救援の声を彼に集中するようのぞんでいる。

矯導所レポート

三カ所の矯導所に収監されているわれわれの友人の消息を伝える。

〈光州矯導所〉

まず梁南国氏(懲役十年)。木工関係の作業に従事し、ちょっとした大工仕事に精を出しているという。それゆえ、差し入れも金尺や製図の本などを要求している。

趙得勲氏(懲役七年)は、縫製作業で主に制服などを製造している。

金哲顕氏は印刷工程の仕事で最近では下獄後悪くした(栄養の関係?)歯の治療に余念がない。三氏とも健康維持に気を使っており、読書も旺盛である。

〈全州矯導所〉

金鍾太氏(懲役十年)がいる。彼は、園芸の作業ゆえ土と格闘しているという。差し入れに花卉の種子を入れるよう求めている。

先頃、大田矯導所から移監された姜鍾健氏(懲役五年)の最近の消息は不明で一説には独房にいるのではと推測されている。

〈大邱矯導所〉

金五子さんは、レース編みの作業を続けている。読書は、以前日本で教会に通っていたことから聖書をよく読むという。

今回差し入れた森有正の作品に感激し、同氏の著作を続けて差し入れてほしいと要望している。

光州矯導所

カンパを

アリバイ物証でる
再審に結ぶか?

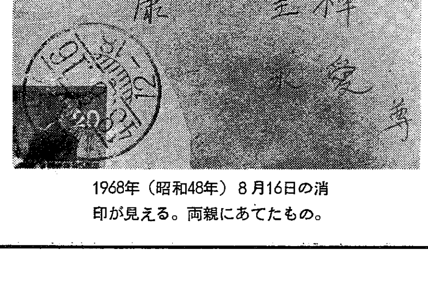
康宗憲氏に三度目のアリバイが出現し、関係者を喜ばせている。

彼の「渡北」した時期は。一九六八年の八月三日から二十三日といわれているが、今回現れた手紙は、その時期に北海道旅行中であった康氏が大阪の両親にあて、旅の様子を綴ったもので、消印は八月十六日付 登別駅前となっている。

先の二度のアリバイは、目撃等の状況証拠であったが、今回は正真正銘の"物的証拠"で、救援会では現在膠着状態の再審の開始へ有力な手懸りになるのでは期待している。

なお、五月八日近弁連はこの書簡と発見した康氏の母親 金永愛(48)＝キム・ヨンエ＝さんの供述を正式文書に作製した。

日弁連もこのアリバイに注目し発信日前後に登別市内の旅館で康氏が投宿した可能性もあることから、各旅館あてに照会文書の発送を予定している。



1968年(昭和48年)8月16日の消印が見える。両親にあてたもの。

カンパのお願い!!

暑いさなか、読者のみなさまお元気でしょうか。

さて、またカンパのお願いをしなければなりません。この不況の折、頻繁にお願いするのもどうかと思い、約三カ月間、必死になって頑張ってきましたが、これが限度です。少い額で結構ですから、ぜひ皆さんのご厚志を!切にのぞむものです。

(送り先きは郵便振替、大阪 4649、摂津富田教会まで)

救援

わが畏友徐俊植君に寄す

西村関一

西村関一氏

……君が気がかりだった……

五月二十七日――。

「二十一世紀を迎える科学者と宗教者の会」という国際会議が近く開かれるが、その準備会議に参席のため私は広島に来ていた。会議の間、私は気に懸かることが一つあった。数日来それが杞憂に終ることを祈っていた。

夕方、市内のホテルに戻ると、私は急いで夕刊を繰った。大きな見出しが踊るように目に飛び込んできた。刹那、私はすべてを諒解した。新聞を持つ手が襲え拭っても拭っても涙が滲んできた。

刑務所の前で、一瞥も許されず、はり裂けんばかりのオモニの胸中を察すると、私は拳を握りしめて泣いた。

……衝撃的出会いだった……

一九七四年五月三日――。

君との出会いはたった一度きりだが実に衝撃的であった。

この日、光州矯導所の所長室で私は初めて君と相対した。

青い囚人服姿で痩せこけていたが、その双眸から放つ凛烈な輝きを昨日のように覚えている。

君は蒼白な表情で、所内の拷問と虐待の事実を語った。私の脳裡には、その迸りでる一語一語が今でも鮮烈に刻まれている。

その響きは、四囲の壁面に共鳴しあらゆるものを呑み込むほどの気魄があった。

死に直面するという極限の状態に置かれても、なお自己の信念を曲げようとしない君に、真理とアガペー（犠牲）の愛に信従する荘厳な姿を見た。

……私の生涯は変わった……

この感動の中で、私は孫のような年齢の君から多くのことを教わった。

当時、猪俣浩三先生の訓導で副理事長の肩書きこそ持っていたが、余り熱心なアムネスティー会員ではなかった。

しかし、政治犯救援という行為が如何に重要で崇高なことかを眼の当りに知らされたのである。日ならずして、私はいくばくもない余生をアムネスティー活動に邁進しようと決意した。

いわば、君は私の生涯を変えた恩人で、今日の私は君とのあの出会い抜きでは語れない。

……ひたすら君を憶った……

私は君との再会を希んだ。あの僅かな時間で語りあえなかったことを、夜を徹しても語りあいたかった。

しかし、七十八才の私はきわめて多忙であり、折しも君の出所予定日とアムネスティー総会の日程が重なった。

四月末から、私は中国を訪ずれていた。上海から、北京から私は東京の事務局に国際電話を入れ、総会の日程を何とか変更できないものか要望した。

しかし、否であった。

私の心は揺れ、明の十三陵も万里の長城もいまひとつしっくりと、馴染むことがなく、君への憶いで、私の気分は優れなかったのである。

旅程の途次、黄浦江の水際に佇み遥か劫初を想わす落日を望んだ。

河は悠揚と流れてやまぬ。渺々とした河面に光彩が散乱し、西空が紅蓮色に染めあげられる中、私は君への飽くなき憶いでまさに断腸の心地であった。

……渡韓へのあくなき憶い……

六月もなかばを過ぎ東京に戻った私は、渡韓か総会かの二者択一に悩んだ。

五月二十七日が目前に迫り、私は暫し逡順した。

が、果然決断した。

君の友人の一人として、君との邂逅を果たすべく渡韓することを。

私はアムネスティー理事長職を辞任した。

……必ず君を迎えにゆく……

あれから旬日を経たが仔細があり、私は君との再会を未だ実現しえないでいる。しかし、必ず君を迎えに行く。そして、私は断言する。「世界」の友人は決して君を忘れないと。

最後に、キリスト者の一人として次の聖句を君に贈る。

「身を殺して霊魂をころし得ぬ者どもを懼るな、身と霊魂とをゲヘナ（地獄）にて滅し得る者をおそれよ」（新約聖書マタイ伝十章二十八節）

健康にはくれぐれも留意することを！

（アムネスティー前理事長）

（小見出しは編集部でつけた）

◆徐光兊氏に◆ 初の差し入れ!!

「康宗憲氏事件」に巻きこまれ、身震いするような凄絶な拷問を告発した徐光兊（ソ・ガンテ）氏【ソウル大、医、四年】に、「11・22救援会」から領置金五〇〇〇ウォンとG相当の食べものの差し入れを行なった。

氏は光州矯導所に八年の刑で服役中で、番号は三六七六番。

なお、本国の学生に日本人からの差し入れは始めて。（※「11・22通信」第8号、二面を参照のこと）

「11・22救」では、「金哲顕氏事件」の金明洪氏の差し入れも試みたが、彼の下獄先きは現在のところ不明である。（この記事は本通信五面の差し入れ記事の続き）

アムネスティー本部 〝緊急行動〟を指令！

徐俊植氏再収監に怒り

徐俊植氏への理不尽な〝再拘束〟という事態に、以前から注視し国際署名を展開してきたアムネスティー日本支部は、五月二十七日夕、「いかなる囚人も刑期満了には釈放されねばならない。今回の措置は全世界の人々の期待を裏切るものだ」との抗議声明を発表した。

また、翌二十八日の同支部総会で「徐俊植氏の無条件釈放を要請する」決議を採択し、抗議電報を韓国朴大統領に送った。

また、アムネスティー本部（事務局、ロンドン）は今回の事態を重視し、六月一日付で全世界三十三カ国の支部に対し、即刻緊急行動（アージェント・アクション）を指示した。

この指示書には「刑期終了後、囚人は速やかに釈放されねばならず、今回の措置はこの規範に著しく逸脱している」とあり、即時釈放を要請する電報、書簡を韓国政府に集中するよう、望んでいる。

なお本紙既報のように、四月初旬には死刑確定の六氏へも同様の〝行動〟が採られている。

時期を同じくして在日韓国人「政治犯」問題が連続して「緊急行動」の焦点になったことは、貿易立国をめざし国際世論に過敏な韓国政府にとっては、少なからぬ打撃であろう。

◇　◇

国際民主法律協会（本部、ベルギー・ブリュッセル）は、六月五日、韓国政府宛の「徐俊植氏及び韓国の全政治犯の速やかな釈放を、世界六十余カ国の加盟協会の名において要求する」書簡を送った。

書評 読者からの手紙

我生きんと欲すれど

A５判、¥1300　〒200

「我生きんと欲すれど」を一読しました。読む者に何事かを感じさせる力を持った書物だと思います。

派手な論理やきらびやかな言葉とは無縁の文章から、本来なにものも犯すことのできない筈である個人のささやかな生活を権力の恣意によって奪われた者の憤りが世の評論家等の文章とは比較にならない程の力をもって伝わってくるように思えます。

金秀顕（キムスヒョン）さん――。私は彼のことを全く知りませんが、妻と子の幸福をひたすら願う、どこにでもいるありふれた市井の人でしょう。

しかし、このような人々が、自からの生活と肉親を守ろうとする気概は、一度触発すれば、もっとも恐ろしいことになる、ということを権力は知るべきです。私はこの本で、人間の素晴しさを教えられました。ありがとうございます。（大阪・望月由季子）

徐兄弟獄中からの手紙

B５判、¥200　〒120

暑い日が続きます。

韓国の夏の暑さはどんなかしら、涼しい風は入るのかしら、と獄中で頑張っておられる方にこんなふうにしか思いをはせられないのですが……。

さて『徐兄弟、獄中からの手紙』長いことかかってじっくり読みました。じーんと目が痛くなった所もありました。

オモニ、アボジそれに兄弟妹のご苦労、心労を察するに余りあるものでした。

それよりももっと、彼ら自身がたゆまず自己たん練につとめ、読書ぐらいしか許されないであろう所を、反対にじっくりと勉強しておられる姿を思いうかべて胸をうたれました。

日本の戦前のような時勢なのかしらね、と友人と語りあったことでした。

いま二人目の友人のところに回っています。ぼちぼちですがあと二、三人に回す予定です。

（岐阜県・牛尾典子）

ドキュメント 大田に移動開始！（4面よりつづき）

大田矯導所

午後9時。大田矯導所。

野村に家族、それに記者団は大田矯導所に着いた。

受付を開始したばかりの係官に徐俊植のことを尋ねる。

「ここに来ている」、とあっさりと教えてくれた。

但し、差し入れは、書類が届いていないと断られる。

記者団は、日本に送稿するため各々、電話にとびつく。

家族は、ひとまず面会の申請を済ます。

野村はやりきれない想いであった。ある程度、予想していたとはいえ実際に一歩も踏み出すことなく移管されたことに、いいようのない憤りを感じた。

また、出迎えの家族らの前を移送された徐俊植の胸中を想うと痛恨のきわみだった。

彼は今後さらに、〝救援〟という二文字がより重く肩にかかってくるのをひしひしと感じた。

記者ノート

〈大田市〉。韓国中西部最大の都市。人口五〇万。ソウルから約2時間。これといって特色のある町ではないが、われわれには郊外の大田矯導所が有名。

昔から政治犯の収容所で知られている。11・22関係の金元重、李東石、金東輝、崔然淑、李元二、蒋明玉ら六氏が収監されている。

全国に伝播!!

9時40分。東京赤坂葵町、共同通信本社。

窓からアメリカ大使館が見える。外報部から一報を受けた社会部の物部は、おもむろに電話にむかい、〝事件〟の関連取材を開始した。時計をチラッとみながら夕刊の早版に間にあいそうだな、と思った。

同9時55分。

全文六十八行、見出し三本の小野田発共同電が、カタカタと独特のリズムを響かせ、テレックスから全国約四十の端末機に送稿を開始した。送稿終了まで約三十分かかる。

（「11・22通信」、第十三号につづく）

救援会短信

◎暑い盛りに通信をお届けします。遅れて大変申し訳ございません。クーラーのない、下着まですぐびしょ濡れになる部屋で、編集部員一同の難行苦行の末にできました。

◎固い記事が多いとの批判もあり、今回は意欲的にドキュメントをまとめました。感想は如何でしょうか、短い言葉で構いませんからぜひ、ご批評下さい。

◎ドキュメントに関してもう一つ。今、この時点でここまで書かなくても、というお叱りがあるかも知れません。しかし、私たちがこれを製作したポイントは、この種の運動が、決して特殊な人でなく、ごくごくありふれた人々によって担われている、ということです。どうぞご寛恕下さいませ。

◎救援会の財政は、現在ひっ迫しています。昨年末から少しずつ貯めていた金額は、この五月行動で全くのオケラになってしまいました。お金だけで運動が維持できるなどと思いませんが、必要条件であることは間違いないようです。使いふるされた言葉ですが、カンパをぜひ、ぜひ！

◎本紙五面左上の差し入れリストの中で、李哲氏への本「文明の生態史観」の著者は、梅棹忠夫氏です。

◎先頃、あるマスコミの人との話のおり、この通信が話題になりました。彼曰く「一つの事件をここまでホローして、新聞が出るなど非常に珍しい。また記事の内容もユニークでいろいろ教えられる」と。で、皆さまにお願いです。このユニークな新聞の購読を友人、知人におすすめ下さい。バックナンバーもあります。

◎咎なく獄につながれた友人を一日も早く救うため、共に頑張りましょう。冬の練獄の寒気もひとしおでしょうが、この暑熱の痛苦も尋常ではありません。